

# 日本語と中国語の「反復性」について

杜 偉峰

(東京外国語大学大学院博士前期課程)

要旨：

現代日本語において、「反復相」と言われてきた用法には、動詞の無標形式「スル」と有標形式「シテイル」と両方使われうる「アスペクト中和」という現象があり、「動作動詞」と「変化動詞」との文におけるアスペクチュアリティーの違いが見られないという特徴がある。これに対して、現代中国語においては、日本語の「反復相」に対応する言語形式がなく、動詞の無標形式しか使われない。本稿は「反復性」において、上述した日本語と中国語との相違という言語事実を記述し、時間的抽象度の視点から、その違いが生じる原因の説明を試みる。動詞のアスペクトと文のアスペクチュアリティーを考察するとき、「一回・具体」的な動作か、それとも「多回・抽象」的な動作か、「時間的限定性」があるか否かという広い意味でのモダリティを考慮しなければならない。中国語学では、各アスペクト形式の意味と用法を論じられることが多いが、以上述べた視点からの研究はまだあまり見られない。本稿は以上のことを考慮しながら、「反復」の意味と用法考察を試みる。

## 1. はじめに

- (1) a. 父ハコノ頃六時前ニ起キテイル
- b. 父ハイツモ六時前ニ起キル

以上の2例は寺村(1984:129)の例文である。寺村(1984:129)はその意味の違いについて、以下のように述べている。

～テイルが表している現在の習慣というのは、発話以前のあるときに始まって、それが発話時に終わらずにつづいている(が、いずれ終わる)というふうに理解される習慣である。(中略)基本形による習慣の表現には、「ある以前に始まった」という意識もないし、また「いずれそのうち終わる」という感じもしない、ただあることが規則的にくり返し行われることを述べているにすぎない。

日本語では、動詞述語が「する」形をとる場合は一部の動詞を除いてテンス的に未来を

表すが、例 (2) のように「動作の反復」文は例 (1) と同じく、時間的にポテンシャルな現在を表している。「動作の反復」文は無標の「する」<sup>1</sup>という形式と有標の「している」という二つの形式が使われている。お互いに置き換えてもさほど意味が変わらない。このような現象について、工藤 (1995) の反復相のところ、「アスペクト対立中和」<sup>2</sup>と説明している。しかし、次のように、上の二例を中国語に訳すと、どちらもアスペクト助詞を用いず、動詞の無標形式‘起 qǐ 床 chuáng’となる。本稿の目的は反復性を表す形式について、日本語と中国語との共通点と相違点を明らかにすることにある。

- (2) a. 父ハコノ頃六時前に起キテイル  
 父亲 最近 六小时前 起床  
 fuqin zuijin liudianqian qichuang  
 父 この頃 六時前 起きる
- b. 父ハイツモ六時前に起キル  
 父亲 总 六小时前 起床  
 fuqin zong liudianqian qichuang  
 父 いつも 六時前 起きる

## 2. 「反復性」についての先行研究

Comrie (1976 : 24–32) は不完結相 (Imperfective) の下位分類として、習慣相 (Habitual) と継続相 (Continuous) を立てている。その習慣性は反復性 (iterativity) と本質的に二つのことにおいて異なると次のように述べている。

一つは‘the mere repetition of a situation is not sufficient for that situation to be referred to by a specifically habitual(or, indeed, imperfective) form.’<sup>3</sup>

もう一つは‘a situation can be referred to by a habitual form without there being any iterativity at all.’<sup>4</sup>

Comrie (1976 : 27–28) はさらに習慣性の定義について、次のように述べている。

‘The feature that is common to all habituales whether or not they are also iterative, is that they describe a situation which is characteristic of an extended period of time, so extended in fact that the situation referred to is viewed not as an incidental property of the moment but, precisely as a characteristic feature of a whole period.’ (下線は筆者より)

<sup>1</sup> 本稿では、基本形を「する」、過去形を「した」、完成相を「スル」、継続相を「シテイル」と表記する。また完成相や継続相の用語は奥田 (1977) に従う。

<sup>2</sup> Comrie (1976 : 116) によると、中和 (Neutralisation) は形態上の中和を指している。つまり、「ある動詞または動詞の形式は、その意味のために、あるいはほかのなんらかの理由で、形態論的にはただ一つのアスペクトの形式をしかもっていない。」ロシア語の例で、完結相としても不完結相としても使われる動詞が挙げられている。工藤 (1995) で言う「中和」は形態論の中和ではなく、形式上、アスペクトの対立を用いながら、意味上は殆ど変わらず、中和している。

<sup>3</sup> 例えば、五回咳払いをしても、ひとまとまりの動作と見なし、完結相の形式が使われる。

<sup>4</sup> 「Temple of Diana used to stand at Ephesus」の例を挙げている。

また、高橋（1985：107-112）は「くりかえしの過程のなかにあるすがた」のところで、次の例をあげて、以下のように説明している。

(3) 彼は漢方医が調合してくれる安価な煎薬を持薬にしてのんでいた。

のむ	のむ	のむ	のむ	のむ
<のむ>という動作をくりかえしつづける=のんでいる				

「このばあいのアスペクト的な意味は、点線でかこまれたひとつひとつの動作でなく、実線でかこまれた過程に関して実現している」

さらに「たくさんの動作をひとつにまとめるとか、また、そのひとつひとつの動作について、動作動詞が変化動詞かに無関心であるといった点で、この用法は派生的だといわなければならない。」と説明している。

工藤（1995：146-163）は反復相を「シテイル」の派生的な意味の一つと捉えているが、「スル」の形でも反復性を表していると述べている。其の区別についてはいくつかの相違点を述べているが、基本的に「スル」は「シテイル」より、時間的により抽象化されると捉えている。

工藤（1995：152-156）では、次の例のように、多回性と反復性とは区別されている。その違いについて、「多回性は運動の複数性の点では、反復性と共通するが、同時に一回性と同様に、時間的限定性のある（具体的時間に釘付けされた）、アクチュアルな運動と捉えているものである。（中略）<反復性>にとってより本質的であるのは、<時間的限定の非具体性＝抽象性>である」と述べている。

(4) 「何度も手紙を書いたよ。でも結局出さなかった。」(多回性)

(5) 「よく行くのかい?」「大概行っていますよ」(反復性)

工藤（1995：146-163）の多回性と反復性はそれぞれ、Comrie（1976：24-32）の反復性（iterativity）と習慣性（habitual）に対応すると思われる。

中国語に関する先行研究の中では、個々のアスペクト形式について論じているものが多いが、動詞の無標形式を用いる反復性を論じるのが非常に少ない。時間的な抽象度という視点から、アスペクトを論じているものも少ない。

本稿では工藤（1995：146-163）の立場に従って、時間的限定性という視点から、「個別・具体」の動作と「脱時間＝超時」を両端に、その間にいろいろな段階があると考え、「反復性」はその中間的な段階と見なし、その構文的な意味と特徴を記述し、日本語と中国語の異同を明らかにする。工藤（1995：146-163）多回性と反復性とを両方とも反復性で見なし、多回性の方は「時間的に具体的である反復性」、反復性の方は「時間的に抽象的である反復

性」と下位分類して捉える。

### 3. 時間的に具体的な反復性

時間的具体性というのはある出来事が具体的な時間のなかにくぎつけられていて、時間的限定性を持っていることである。

#### 3-1. 動作主体が同一である場合

(6) 私は中国に三回行きました。

我 去 了<sup>5</sup> 三 次 中国。  
Wo qu le san ci Zhongguo  
私 行く LE 三 回 中国

例 (6) のように、繰り返しの動作の反復は修飾語によって表されている。各動作は均一的な質を持っている。このような動作は、別に回数によって新しい質を獲得したわけではなく、何度反復されても一回のようにひとまとまりの動作と扱うのである。

(7) 私は中国に無数回に行きました。

我 去 了 无数 次 中国  
Wo qu le wushu ci Zhongguo  
私 行く LE 無数 回 中国

例 (7) のように、動詞は「スル」という完成相を基本的にとるが、継続相の「シテイル」に変えると、パーフェクトに成る。このように、日本語において、動詞はテンスの対立があるだけではなく、アスペクトの対立もある。

(8) 私は中国に三回行っている。

我 去 了 三次 中国 了<sup>6</sup>。  
Wo qu le sancì Zhongguo le  
私 行く LE 三回 中国 LE

中国語はテンスを持たない言語であるが、アスペクトを持っていると広く認められている。以上のように、過去における同じ動作の積み重ねを表現するとき、日本語ではアスペクトの対立があるので、完成相とパーフェクトとの違いが有るのに対して、中国語ではアスペクト助詞「了1」と語気助詞の「了2」を用いるのである。また未来の場合は、次のよ

<sup>5</sup> 「了」はアスペクト助詞（動態助詞）で、完了体を表すアスペクトマーカである。

<sup>6</sup> パーフェクトの標識である、望月（1997）を参照。

うになる。

(9) 私は来月三回中国に行く。

我 下 个 月 (要<sup>7</sup>) 去 三 次 中国。  
Wo xia ge<sup>8</sup> yue yao qu san ci Zhongguo  
私 次 月 行く 三 回 中国

例 (9) が示すように、中国語では未来の場合はアスペクト助詞を使わないが、その代わりに「要」や「将」を用いることが多い。過去か未来かによって、助詞を用いるか否かというのはまるでテンスの対立のように見える<sup>9</sup>。

以上のように、日本語では、このような動作の反復はまだ、テンス・アスペクトの対立があって、具体的な時間の中にくぎつけられて、時間的な限定性を持っている。中国語では、動作の反復は、過去か非過去かによって、アスペクト助詞を用いるか否かのことである。両言語ともアクチュアルな現在を表すことが出来ない<sup>10</sup>。一回・具体的な動作との違いはただ回数を表す修飾語があるか否かのことである。しかし、次の例のように、別に回数を表す修飾がなくても、反復の動作を表している。

(10) 彼は机を叩いている。

他 敲 着<sup>11</sup> 桌子<sup>12</sup>。  
Ta qiao zhe zhuozi  
彼 叩く ZHE 机

「叩く、うつ、つつく、ける」のような動詞は継続相のかたちで、動作の継続の意味を表しながら、動作の反復という意味も読み取れる。ただし、動作の反復は連続的な反復で、いわゆる連続的な点で線になるということである。このような動詞が継続を表す場合は、その動作が一回一回に分割される動作として数えられるという特徴を持って、しかも一回の動作の実現は瞬間的である。語彙的に「打撃」というタイプの動詞はほとんどである。

### 3-2. 動作主体が複数である場合

(11) 学生たちが続々と教室に入っている。

<sup>7</sup> 元来は願望や義務を表す法助動詞で、あたかも未来標識のように機能している。

<sup>8</sup> 量詞である。

<sup>9</sup> このような現象は別に反復だけに限らず、一回・具体的な動作の場合も同様である。

<sup>10</sup> 日本語は「シテイル」という形式を使っても、パーフェクトになり、アクチュアルな現在ではない。

<sup>11</sup> 進行を表すアスペクト助詞。

<sup>12</sup> 「他在敲桌子」にも訳せるが、動作の継続を表すには「在」と「着」があるが、ここではその違いについて論じないことにする

学生们 陆陆续续地 走 进 教室。  
Xueshengmen luluxuxude zou jin jiaoshi  
学生たち 続々と 歩く 入る 教室

「入る」「死ぬ」のような主体変化動詞は継続相のかたちで、「結果の継続」を表すのが普通であるが、主体が複数であるがゆえ、「続々」の助けで、動作の時間が幅を持つようになり、「動作の継続」の意味へ移行し、別の出来事と共起することが可能である。この現象を寺村（1984：130）は「点の連続としての線」という空間的な比喩を使って説明している。

(12) 学生たちが続々と教室に入っている。そこに、校長先生が来た。

学生们 陆陆续续地 走 进 教室。那时，校长 来了。  
Xueshengmen luluxuxude zou jin jiaoshi Nashi xiaozhang lai le  
学生たち 続々と 歩く 入る 教室 その時 校長 来る LE

このように、日本語は有標の形式「シテイル」であるのに対して、中国語は無標の形式で表している。もし「はいる」という動作が完了した後に、「校長先生が来た」であれば、中国語はアスペクト助詞「了」を用いる。以下のようになる。

(13) 学生たちが続々と教室に入った。まもなく、校長先生が来た。

学生们 陆陆续续地 走 进 了 教室。不一会儿，校长 来了。  
Xueshengmen luluxuxude zou jin le jiaoshi Buyihuir xiaozhang lai le  
学生たち 続々と 歩く 入る LE 教室 まもなく 校長 来る LE

しかし、主体が複数であっても、必ずしも以上のように動作の継続性を持つようになるとは限らず、「徐々に、段々と、しきりに」の副詞や文脈の助けが必要である。次の例は主体が複数であっても、「もう」という副詞の力もあって、「動作の継続」とならず、「結果の継続」となる。

(14) 学生たちはもう教室に入っている。

学生们 已经 走 进 了 教室。  
Xueshengmen yijing zou jin le jiaoshi  
学生たち もう 歩く 入る LE 教室

#### 4. 時間的に抽象的な反復性

時間的抽象性というのは具体的な時間にくぎつけられていない、時間的限定性を持たないことである。客観的に見れば、次の例のように、ミクロに見れば一つ一つの動作は時間的な具体性があるけれども、話し手は具体的な動作を指すのではなく、くりかえし全体と

いう出来事が現在に属するとマクロに捉える。現在を表すには、継続相が使われるのが普通であるのに対して、このような反復は完成相でも継続相でも使う。工藤（1995）が言う「アスペクト的な中和」である。ただ、この場合の現在はアクチュアルな現在ではなく、ポテンシャルな現在である。「動作の継続」か「結果の継続」かはそれぞれ「動作動詞」か「変化動詞」かという動詞の語彙的な意味によって決めてかかるが、「時間的に抽象的な反復性」の場合は例文（15）と（16）が示したように、このような違いは見られない。

(15) 私は毎日テニスをする（している）。

我 每天 打 网球。  
Wo meitian da wangqiu  
私 毎日 する テニス

中国語では無標で、ただ動詞を提示するだけで、アスペクト助詞を用いないのである。次のは過去の例である。

(16) 金魚は毎日一匹ずつ死んでいる。

金鱼 每天 死 掉 一 条。  
Jinyu meitian si diao<sup>13</sup> yi tiao  
金魚 毎日 死ぬ 一 量詞

(17) 私は昔しょっちゅうテニスをした（していた）。

我 以前 经常 打 网球。  
Wo yiqian jingchang da wangqiu  
私 昔 しょっちゅうする テニス

このように、日本語では、過去－非過去というテンスの対立がまだ残っている（それはもう過去と非過去との対立ではなく、過去と現在の対立である）が、アスペクトの対立は中和して、その意味的な違いは微妙で、ほとんど判断できない場合が多い。完成相でポテンシャルな現在を表すのはこのような抽象的な反復文のもっとも重要な特徴であろう。テンスの対立は多少変異があるとしても、まだ残っているので、完全に時間に解放されたとは言えない。未来の場合は、このようなアスペクト的な中和が生じないで、完成相しか使わないのである。これに対して、中国語は過去にしる、現在にしる、未来にしる、アスペクト助詞を用いず、どちらも無標のかたちで表現されている。その過去か現在か未来かは時間的な副詞によって表されている。このような周期性を持って、具体的な時間に釘づけられていない場合、中国語では以下で述べる「超時」と同じ扱いである。その動詞はただ単語の語彙的な意味を提示するだけに留まる。

---

<sup>13</sup> 結果補語。「消失してしまう」や「取り除く」の意味である。

この点については Comrie (1976 : 113) でロシア語の例を挙げて、無標の不完結相については‘constative general factual meaning’ (確認的・一般的・事実的な意味) と‘denotative meaning’ (さしめしめし的な意味) として使用されると述べている。また、日本語の「する」という無標形式について、山田 (1908) は「直接表象」と呼んでいるし、尾上 (1982) では「直接的、素材的、直感直叙的である」と述べている。

この時間的な抽象化がもう一步進めば、テンスやアスペクトの対立がなくなり、時間から解放された「超時」になる。

(18) 水は百度で沸騰する。

水 一百度 沸騰。

Shui yibaidu feiteng

水 百度 沸騰する

このような文は、先に述べた「時間的に抽象的な反復」と同じく、構文的特徴として「～は～する」という題目－解説の文型を取っており、述語の品詞が動詞の形を取っているにもかかわらず意味的には形容詞文に近づく。

ちなみに時間的な抽象度という視点から、次の例のように、時間的な抽象度が非常に高いにもかかわらず、「シテイル」形式に限定している。

(19) 私は中国語を教えている。

我 教 汉语

Wo jiao Hanyu

私 教える 中国語

(20) そのコンビニはお酒を売っている

那 家 便利店 卖 酒。

Na jia bianlidian mai jiu

その 量詞 コンビニ 売る 酒

高橋 (1985) はこのような例を「大規模な動作」と説明して、「くりかえしの過程のなかにあるすがた」の一部と扱っている。

工藤 (1995) では (19) のような例について「職業を表す場合は、非アクチュアル性が強く、特性規定的であるが、シテイル形式に限定している」と指摘している。

このような社会的な活動の場合は一回・具体的な動作を指すのではなく、意味的には「時間的に抽象的な反復」よりも抽象化しており、「～は～」構文が使われているにもかかわらず、「シテイル」形式に限定されている。それに対して、中国語では動詞の無標形が使われ



ている。なぜ日本語では「シテイル」形式に限定しているか、このような用法をどのように位置づけすべきかは今後の研究課題としたい。

## 5. まとめ

以上のように、一部の動詞（たたく、うつ等）を除いて、動作の反復を表すには、日本語も中国語も、回数や反復の意味は副詞的修飾語によって表される。ただ、「時間的に抽象的な反復」の場合は、日本語において、動作動詞と変化動詞の違いは見られない。どちらも「点の連続としての線」となって、アクチュアルな現在を表さず、独自のアスペク的な意味を持っている。この意味では継続相の二つの基本的な用法（「動作の継続」と「結果の継続」）とずいぶん違うところで、日本語においては「反復相」を立てる必要があると思われる。事実上、動作が一つ一つ行われるかもしれないが、その動作は具体的な過程があるのではなく、非過程的である。その時間的な抽象度にしたがって、両言語は動詞形式の使い分けの相違が見られる。日本語は「時間的に抽象的な反復」の場合は、テンスの対立はまだ残っているながら、「スル」と「シテイル」の両方が使われる。一方、中国語は「時間的に抽象的な反復」の場合、動詞の無標形式しか使われないのである。この両言語の相違を以下のように、表にまとめてしめくりたい。

(21)

抽象度 言語	一回・具体	時間的に 具体的な反復	時間的に 抽象的な反復	超時
日本語	テンス・アスペクト の対立有	テンス・アスペク トの対立有	テンスの対立有 アスペクト中和	無標
中国語	アスペクト対立有	アスペクト対立 有	無標	無標

## 参考文献

- COMRIE, Bernard (山田小枝訳) 1988: 『アスペクト』, むぎ書房. (原題 *Aspect*, 1976.)  
 戴耀晶 1996: 『現代汉语时体系统研究』, 浙江教育出版社.  
 郭锐 1997: 「过程和非过程---汉语谓词成分的两种外在时间类型」, 『中国语文』第三期.  
 金田一春彦 1950: 「国語動詞の一分類」, 『言語研究』15 (金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房1976に所収).  
 工藤真由美 1982: 「シテイル形式の意味記述」, 武蔵大『人文学会雑誌』13巻4号.  
 ————— 1987: 「現代日本語のアスペクトについて」, 『教育国語』91.  
 ————— 1989: 「現代日本語のパーフェクトをめぐる」, 『ことばの科学』第三集, むぎ書房.  
 ————— 1995: 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』, ひ

つじ書房.

李臨定 1986:『現代汉语句型』, 商务印书馆.

望月圭子 1997:「中国語のパーフェクト相」, 『東京外国語大学論集』 55.

野村剛史 2003:「存在の様態——シテイルについて——」『国語国文』 72/8.

奥田靖雄 1977:「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」, 宮城教育大学『国語国文』 8 (『ことばの研究・序説』所収).

———— 1978:「アスペクトの研究をめぐって (上・下)」, 『教育国語』 43, 54 (『ことばの研究・序説』所収)

———— 1983:『日本語文法・連語論 (資料編)』, むぎ書房.

———— 1988:「時間の表現 (1), (2)」『教育国語』 94, 95.

尾上圭介 1982:「現代語のテンスとアスペクト」, 『日本語学』 1/2.

須田義治 2003:『現代日本語のアスペクト論』, 海山文化研究所.

鈴木重幸 1972:『日本語文法・形態論』, むぎ書房.

高橋太郎 1985:『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』, 国立国語研究所.

寺村秀夫 1982:『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』, くろしお出版.

———— 1984:『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, くろしお出版.

———— 1991:『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』, くろしお出版.

山田孝雄 1908:『日本文法論』, 宝文館.